

パネルディスカッション講演録

パネリスト	京都大学総合博物館 准教授	塩瀬 隆之<リモート参加>
	認定 NPO 法人ムラのミライ 代表理事	中田 豊一
	Earth Company 共同創設者、共同代表	濱川 知宏<リモート参加>
コーディネーター	人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 教授	
	財団環境事業選考委員長	阿部 健一

阿部)お三方のご経歴や、なさっていること、講演テーマからみて、それぞれ違ったお話になることを想像していましたが、先ほどお話をお聞きして、それぞれの話が繋がっている、繋がっているだけでなく響き合っていると強く感じました。このディスカッションでは、その響き合っているところが何であるかを明らかにすることが、今日のテーマである「コロナ時代の社会変容」を考える貴重なヒントになると思います。それでは最初に、年長者である中田さんのお話、メタファシリテーションについて、まず塩瀬さんに問いかけていただきたいと思います。

塩瀬)中田さんのお話で、「朝ごはんに何を食べましたか」という問いかけがありましたが、実は私が毎回ワークショップに使っているものと同じもので、今日の講演の中の最初の問いかけを、「高度な技術を」と書き換えなければ、まったく同じセリフになるところでした。著書「問いのデザイン」の中で、朝ごはんの食べ方の文章を因数分解してみるということを書いています。「今朝何を食べましたか」から始めて、「今月食べた一番豊かな朝ごはんは何ですか」というように形容詞や考え方が入ってくると難しくなっていく、最上級になると「自由に朝ごはんについて議論ください」に至ります。普段企業とか組織の中でも、「さあ、自由に何でも話しましょう」とよく言いますが、実はそれがかえって話にくくなってしまふ。そこで、自分の中だけでの考えではなく、事実や立ち位置について話をする場をつくることに腐心してもらおうとして本を書いたのですが、全部メタファシリテーションに書かれてあったのではないかと少し悔しさもあります。ただ、全然違う場所から全く同じところに辿り着けた気がして、若輩の自分が間違っていなかったと確認できてとても嬉しかったです。

阿部)いや、本当に見事な一致だと思いました。塩瀬さんは「技術」の研究をしながら、ご自身コミュニケーションを大切にされてこられてこのような研究をされている、中田さんどうです

か。中田さんご自身は国際協力の現場からこのメタファシリテーションという対話手法を編みだされたということですが、塩瀬さんも同じ手法に辿り着くということは、国際援助やそういったものだけに留まらない、どこか普遍的なもの、大切なものがそこに含まれているような気がするのです。いまメタファシリテーションが、どういったところで新たな光が当てられ、またそのあたりをどう感じていらっしゃいますでしょうか。

中田)先ほどお話しましたように、最初は国際協力の世界だけでした。これが国際協力の世界から誕生したことには大きな背景がありまして、私たちの援助、特に対外援助というのは、やりっぱなしで誰からも咎められないのです。ビジネスの世界だと最終的な利益、売上、反響などを想定して遂行しないといけないのですが、援助の世界はそれが無い。お互いの思惑が全く食い違っても問題もなく進んでしまうことへ、私自身大変フラストレーションを持ってしまったことが出発点となったのです。そういう意味から、例えば親と子の間においても、30年経てば全てが激変しており、使う言葉が同じであっても、話の中身は全然違ってしまうことが起こります。おそらく今日参加いただいている企業に勤めるご年配の方は、若い職員の方に対して同じ言葉を使っても全く噛みあわないというご経験、ご苦労をされていると思います。私たちが何気なく使っている言葉は、実は思い込み満載の言葉になっているわけです。先ほど塩瀬さんは因数分解という表現をされておられましたが、メタファシリテーションは、必要とされる場面であればどこにでも使えるということが最近分かってきた、もしくは実証されてきたと思っています。実は体系化した時点でもそう思っていたのですが、それを本格的に広めていく体力が私たちの団体にありませんでした。他方、試しに私が自分の子供へやってみたらところ子供の反応が良く何でもお父さんに話してくれるようになり、それを仲間に話すとは是非うちでもやりたいから教えてくれというような感じで広がり始めました。最初は国際協力という大きな背景の下、お互いの思い

込み、お互いの思惑でやりとりし、それで成り立ってしまうという世界において、そのことへ疑問を持ったところから始まった訳ですけども、それは何処にでもある。私が最初にこの50～60年で何が起きているかということをしりだけ皆さんにお話しましたが、この急激な変化のなかで、途上国でも同じだと思います。バリ島のお爺ちゃんとお祖母ちゃんが生きていく世界は、若い人たちのそれとは全く違うもので、その中で各々思い込みに基づいてコミュニケーションがされており、必要なのは、まず本人たちが気づき、真摯なコミュニケーションをいかに確立できるかということではないかと思ひます。

阿部) 有難うございます。身に覚えがあることばかりで、家族への会話もおざなりだった気がします。濱川さん、中田さんのメタファシリテーションについていかがでしょうか。またお話のなかで、開発援助とビジネスとは違ひ、ビジネスはやりっぱなしではだめだと話されておりました。濱川さんはまさにそれをビジネスにしようとしておられます。その辺りも含めてお話を聞いています。

濱川) はい、有難うございます。中田さんのメタファシリテーションの話はすごく興味深く、これはただのコミュニケーションツールではなく、何かもっと大きなパラダイムシフトのことを指しているのかなと感じました。というも、開発援助というのは元々上下関係があり、支援する側と支援される側で、支援するほうが経済的優位にあり支援してあげるといふ立ち位置だと思ひます。そのなかで、途上国、支援を受ける側に自己肯定という概念が足りていなかったと思ひます。そこを、メタファシリテーションの重要なコンセプトとして、その点を強く重んじていると感じました。事実を確認し、良いところを確認しながら、その人たちがどういふ考えの下にどう発展していくべきかということを我々が学ぶ立場でいる、というところがいま必要とされているパラダイムシフトではないかと思ひます。支援する側が経済的に優位であっても、例えば幸福度だとかウェルビーイングに関しては、日本やアメリカは先進国ではなくいわば後進国です。自殺率は高く、犯罪率も高いことを考えると、いわゆる途上国から学ぶのはとても大きいのではと思ひます。私も実は10代にフィジーを訪れて、経済的豊かさや精神的豊かさの反比例みたいなものを見せられたのが原体験となっています。本当に何もないう村にいながらとてもハッピーで温かく、まさにこれが人間味というものなのかなと魅せられたのです。一方で東京やニューヨークへ行くと、表情は暗く、人生楽しくないという人たちが多く、何のために人間や社会は経済的発展を目指しているのだろうかというのを問ひ始めたのがその時でした。まさにそういうメタファシリテーションを通してのシフトが、今必要なのではないかなと思ひており

ます。いま開発援助の業界も、確実に変わってきていると感じておまして、中田さんがお話されたやりっぱなしや説明責任がないやり方は、ある意味非常に批判されているなか、やはり本当の意味での現地・現場に根差した活動、現地・現場の人たちの考えや方向性を汲み取るやり方というのが、そうでなければ長期的に成功しないはずですので、少しずつそちらへシフトしているかなと思ひています。そのなかでビジネスの手法は非常に重要であって、いまソーシャルビジネスという領域がここ10～15年で非常に活発になってきました。そういう意味から、ソーシャルビジネスはツールとして求められているのではないかと思ひます。

阿部) 有難うございました。濱川さんから活動をご紹介いただいた際に、いろいろな組織がロゴマークでいっぱい登場しました。インクルーシブ、どこかからお金を貰ってではなく、皆からお金を貰ってという活動ですね。濱川さん、インクルーシブについてお話しください。

塩瀬さんにも聞きたいことがあります。信用について、中央集権的な信用と分散型の信用と言われ、各々メリット、デメリットがあり、どっちがどっちでもないと言われました。しかし、現時点ではどう考えているかということを取って聞きたいと思ひます。そして私は出来るだけ楽をしたいと思ひ始めていますので、お二人のお話に対して、中田さんからコメントをいただきたいと思ひます。それでは濱川さんからお願いします。

濱川) ありがとうございます。我々が特に意識している点は横の繋がりです。コレクティブインパクトという考え方がここ10年ぐらいで出てきたと思ひますが、簡単に分けると、民間セクターや行政というのは縦割りの上下の関係であって、ソーシャルインパクトや社会課題を解決していくためには絶対横のつながりがないと解決できないと思ひています。我々アースカンパニーのような小さな団体が大きな貧困問題や人権問題、難民問題などを解決できません。いろいろなパートナー、NGO業界だけではなく、民間セクター、政府、市民団体などもコラボレーションし、シナジーを出していかないと無理だと思ひています。我々は6～7割を寄付や助成金を収入源とし、3～4割を自己収入で運営していますが、寄付してくださる方々も上下関係というかたちではなく、一緒に社会課題を解決しようというかたちをなるべく作ろうとしています。ドナーというよりもパートナーという考え方に立って、各事業においてパートナーさんをすごく大事にしています。

阿部) ありがとうございます。それでは、塩瀬さんお願いします。

塩瀬)はい。実は「問いのデザイン」と同じように、「インクルーシブデザイン」という本も出させていただいております。インクルーシブを考えていくのに、バリアフリーやユニバーサルデザインと少し違うところは、当事者の人たちに一緒に入ってもらって解決するというので、その際のキーワードとして大事なのは、「ために」から「ともに」へいかにシフトするかだと考えています。この「ために」というのは、例えば助ける人と助けられる人とか、学校でいうと教える人と教わる人というように関係を固定化してしまうことに課題があると思うのですが、「ともに」という両方が解決者であり学ぶ人であるという状況をいかに作れるかということが、さきほど中田さんも話されていた対等感ということだと思います。これが平等、公平ではなく、対等であるということに重要性がありまして、平等・公平はどちらかと言うと立場が上、先ほど濱川さんも話されていた、援助する力のある人が上に立ち、それ以外の人たちは平等に不公平さをつけずというふうに見えるのですが、助けを出す人はその舞台にいないのです。学校の先生が授業をするとき、Show的に面白い授業をすることは出来ますが、どうしても主演する演者と観客のかたちになってしまう。生徒を舞台に上げるのにはどうしたらよいかと考えるのが、平等と対等の違いなのだと思います。という意味で、インクルーシブデザインで大事にしている「ともに」へという舞台に一緒に上がるためにも対等な関係、対等な話し方というものにも対話技術というものが必要になろうかと思えます。

阿部先生からご質問いただきました、信用というものを中央集権か自律分散にするかの観点についてお話しますと、これまでは信用というものが中央集権でしか手に入らないと思っていた。元々人と人の繋がりの中に信用があったはずなのですが、何か肩書や、政府、権威などを頼りにしなければならなくなりました。人間関係の希薄さが直結しているものと思います。では、もう一度人と人の繋がりを取り戻すという意味で言うと、いま自立支援の自立ということが、一人で強くなって孤立するというほうへ向かっている気がしています。本当の強さとは、人と人に繋がって、頼るときには頼る、頼れるというのが本当の強さではないかと思っています。孤立、独立でもない自立というものがあると思います。それが、横に繋がった信頼だと思うので、先ほど2択のような言い方で今の技術のありようが出ているのですが、本来は両方使いこなせるものでもあるし、あわよくば本来横の繋がりだけでいけるはずなのですが、信頼だと思って横に繋がったものが新たな中央集権だと思い込んでしまうと、またそこへ依存してしまうかもしれません。もっと個人の中から沸き立つ信用・信頼できる繋がりを、そういう意味でパートナーを沢山増やしていくという濱川さんが話されていたビジネスモデルは、とても素敵だなと思います。インクルーシブは、巻き込みつつ巻き込まれ

ることが大事だと思っています。最初は作り手、助け手であったのが、いつのまにか「学んだ」とか「気付かされた」という機会が増えていくほど、横連帯としての信頼を信用できるようになる。

先ほど中田さんがお話しされた、国際交流、国際貢献で出来たことは家庭の交流でも使えるのではないかということについて、私のほうは順番が逆さまで、教育やデザインの世界において、「ロボットと人間がどうやってコミュニケーションが出来るか」とか、「目の見えない人と一緒に美術鑑賞のコミュニケーションが出来るようになるか」とか、「熟練技の伝承のなかでどうやって師匠と弟子がコミュニケーションできるか」など、全て違う場面でのコミュニケーションについて、横に見渡した時に、私自身たいした国際開発の経験が無いのにもかかわらず、これは国際開発などと同じですと語り続けてきました。おそらく一緒ではないかと思って。しかし今日濱川さんと中田さんのお話をお聞きし確信できましたので、言ってきて良かったなと思いました。

阿部)有難うございます。中田さんどうですか。発表では、あとは若い人に任せたいなことも話されましたが、いやいや、まだまだ僕もというようなお話をお願いします。

中田)そう思いたいのですが。なかなか身体がついてきません。それより塩瀬さんからいただいた朝ごはんの話の件ですが、私もごく最近メタファシリテーション講座の受講者からこういう本があって書かれていると紹介され、同じことを考えている人がいるのだと話してたいところでした。私自身はフランス文学科という文科系中の文科系を出たものですから、理科系への憧れが強くあって、理科系の人と繋がって共有できるものがあるというのがとても嬉しく思います。ただ文科系とか理科系とかそういうこと自体が古い考え方で、今ではもうほとんど意味がない。そういう意味でも、このように本質的なところで繋がっていける関係が今日またひとつ生まれたことについて正直喜びを感じます。もうひとつ申し上げたかったのが、今日濱川さんが登場して顔が見えたとき、本当にいい顔されていて、皆さん癒されたのではと思います。バリ島で暮らしていたらこういう顔になるのかと。また一緒にやっておられるスタッフの方も、自然にそういういい顔をされている。そういうものが、繋がり合える根底にあるのではと思いました。勿論みんな苦しい時もあり、ギスギスしたときもあるのですが、ベースとして、ゆったりと穏やかな表情がある生活を目指して繋がっていくのだなど。事実じゃなく、非常に情緒的な感情、思いなのですけれども、私は若いお二人が、とても生き生きとある意味楽しそうに話されるのを見て、癒された、今日はここに来て良かったとつくづく思いました。10年ぐらい前から都会

のギスギス感に何か息苦しさを感じていましたが、若い人たちはそうじゃなく生き生きとやっていて、そういう人たちと出会うことでエネルギーをもらいます。若い人たちが活動をしやすいようにバックアップをしていくのが俺の仕事かなと思ったりしていたのですが、いややっぱりそうだな今日は思いました。

阿部) 有難うございました。中田さんもいい顔していると僕は思いましたが、本当に楽しそうに仕事をされている、それは濱川さんへも、塩瀬さんへも言えることです。どこからその楽しさが出てくるのでしょうか。本来なら問題解決へ眉間に皺を寄せるようなことだけど、それを楽しくする術、それぞれお伺いしたいと思います。

濱川) そうですね。我々がバリにいるということは大きな要素とは思いますが、我々アースカンパニーで大切にしているコンセプトが、Be Do Have という考え方です。これはバリに6年前に移住した頃ある人から聞いた話なのですが、元々従来のロジックは、私もそうでしたが Do Have Be、まず勉強や仕事など何かに励むという Do、そうするとお金や家などが持てますよという Have、その延長線上に喜びとか、幸せなどの Be がくるといふ、頑張つて幸せを勝ちとるみたいな考え方でした。一方でこの Be Do Have の考え方は、まず自分はどのような環境で、どのような人たちと、どのように取組む時が一番楽しく幸せであるか、自分の Be を最初に理解して認識する。そうすることで、自分のやるべき Do が自ずと分かってくる。自分の Do に活力が出て、真面目に取り組める。その結果お金を稼ぐとかの Have がありますが、その延長線上には何も無いというものです。最初に Be というものを感じて、そこでアライメントをもつことが重要と示唆しており、とても単純なロジックですが、本質をついていると我々アースカンパニーチームは思っています。いま注目されているマインドフルネスですか、エディテーションなども最初の Be に入ってくるので、そこがいま見直されていて、特にこのコロナ禍において、会社に行って仕事をするという大前提が取り壊されたときに、何が大事なのか、何が幸せなのかということを考え直す、すごくいいツールではないかと思えます。

阿部) 有難うございました。それでは塩瀬さん。何故いつも楽しそうに仕事が出来ているのか、是非聞かせて下さい。

塩瀬) 私の座右の銘が「好奇心の下にはみな平等」でありまして、好奇心に基づいて楽しんでいる人と一緒に仕事をするようにしています。アクセル・ハッケとミヒヤエル・ゾーヴァの「小さな小さな王様」という絵本がありまして、その手のひらサ

イズの王様の国では年をとるとだんだんいたずらっぽくなり、好奇心旺盛になる。ダメと言われても思わずしてしまうような国で暮らす王様が現実世界へ出てきて、「何故みんなしゃべらなくなるの?」「笑ったり、怒ったりしなくなるの?」「皆の言うことを聞くの?」というのを子供に問いかける話なのですが、それを地でいくような、「小さな小さな王様」のような人とばかり会うようにして、そうすると自然にずっと笑っている感じがしています。禅の言葉で、「我逢人」という言葉がありまして、我逢人なりという、誰と出会ったかということが自分を創るといふ禅の言葉なのですが、先ほどの面白そうだなと思っている人とずっと会っていると自分もずっとそうでいられるので、そうじゃない人が来たら逃げるようにしています。

阿部) 有難うございます。我逢人という言葉覚えておきたいと思えます。最後に中田さん。

中田) 私自身謙遜ではなくそんない顔とは思わないですし、ただのおっさんの顔と思っています。ただ私の仕事は人と会ってなんぼの商売で、相手を信頼しないとこちらから質問することを許してもらえないので、出会った瞬間に相手を信頼しよう、信用しようと努力をしてきましたので、段々そのことが習慣になってきました。今日も私がそこに座って前を向いていた時はとても緊張していたのですが、立ち上がって後ろを振り向き皆さんの顔を見た瞬間にすっと緊張がとれ、おそらくその時から皆さんの心に響くような話がしたいという気持ちになり、私の商売用の顔が出現したのだと思えます。それは意図的ということではなく、さきほどまさに塩瀬さんがおっしゃった我逢人ですね。人と出会うなかで自分を創っていくということを実践してきた結果として、普段は苦虫を噛み潰したような顔で地下鉄の駅に向かって歩いているかもしれないのですが、皆さまの前では少し親しみやすい顔になるようにと自分に課しているのかなと思えます。やはり、人と出会わなければ何も起こらないと思えます。

阿部) 有難うございます。会場のほうから質問をいただいております。先ほど中田さんも危惧されていたことで、我々は変容とか、あるいはシフトしていかなければと言っていますが、そういった我々の日常的な変化や動きと全く別に、社会があまりにも加速度的に変わりすぎている、その中で自分はどういった心構えでこの変化のなかを生きていかなければならないのか。今回のテーマは変えていくということですが、むしろ流されないようにするためにどうしたらよいかとのご質問です。濱川さん、塩瀬さん、中田さんの順でお答え願います。

濱川) 少し前に現代人が1日に受け取る情報量は江戸時代

の1年分だったというのを読みました。平安時代にまで遡ると何十年分のような感じです。勿論平安時代や江戸時代に比べて人間として、動物としてはそんなに進化はしていないはずで、ただ環境が変わっていったということ。そのギャップはとても感じていて、スピードに対応していくというのは非常に大切なのですが、ノイズをカットオフする必要性を凄く感じています。そうしなければ、情報や社会のスピードに流されてしまいます。やはり、なるべく自分の時間を作って、変化を自分からドライブする、自分からリードするというのが重要なのではないかなと思っています。

阿部) 有難うございます。スピードと言っているけれど情報量の違いなのだと、大事な指摘だと聞いておりました。塩瀬さんはどうでしょうか。

塩瀬) 私自身も情報の量というのはとても重要な視点だと思います。そして情報の量だと皆が思い込んでいるとしても、本当はデータ量が増えているだけと考えます。情報というのは自分にとって価値のある、次の行動に資するようなものなのであるはず。そうではないものまで情報だと思いついて、メディアに出ている文字数を全部受け取らなければならないような強迫観念になってしまいます。先ほどのお話しで、平安時代、江戸時代、今の時代で人間の読解力はそんなに上がっていません。情報処理能力も然りです。百年後の日本という本が1920年に出版されていて、今年ちょうど100年が経ちました。350人ぐらいの有識者が100年後を占っているものですが、その中で達成されているものとして、選挙権が18歳になる、世界第一の富国、女子の大臣・学長というのがあり、未達成として、世界的繊維工業国、人口増加生活困難、火星旅行の中継地に富士山が決まるなどが挙げられています。100年後を予測することは意味がないと言われる有識者も大勢いらっしゃいますが、大事だと思ったことは、選挙権が18歳になるというのは100年前のあるべき目標であり、理想であったのではないかと。逆に世界的繊維工業国というのは今では鼻で笑われるかもしれませんが、当時の人たちは大真面目だったと思います。その時代の波に乗って、ここで世界を取ろうした時代の予測としては正しかったと思うのです。もう一つ、火星旅行の中継地に富士山が決まるというのは妄想に近いのですが、逆に妄想には力があって、つい先々月にもクルードラゴンというアメリカで初めて民間で宇宙に人を打ち上げたとありました。私自身は理想と予測と妄想があったときに、理想と妄想を頼りに社会を作っていくことは、ブレない確かな軸になり得るのではないかなと思っています。予測というものに自分たちを合わせて計画をしようとするが故に、変化のスピードに振り回されているような

気がします。自分にとって本当は情報でも何でも無いはずのデータに左右されず、自分がやってきたことを信じて、向かうべき道を大事にするとか、もっと価値観の変革が必要ではないかと思います。言うほど変化はしていないと思ってもいいかもしれません。

阿部) 有難うございました。塩瀬さんが大切なことをおっしゃいました。情報って本当に大切なものはそれほど多くない、これは濱川さんがノイズといったのと同じかなと思いました。本当に大切なものは、昔から変わってないのかもしれない。それでは中田さん。

中田) 単純に言って、都会の生活は忙しくて、気忙しい。ではその気忙しいは、生活のリズムの調整や心の持ち方で緩和できるのかということへ私は大きな関心を持ち、座禅を組み、運動やマインドフルネスみたいなことも人並みにはやってきました。しかしながら、都市生活はそういうものだけでは抗しきれない激しい変化の対応を迫ってくる気がして、都会に在る限りなかなか難しいと思ってきています。そうであれば、変化からくるプレッシャーから上手に逃げるために、自分自身のライフステージに合わせて、いい環境の中に自分を物理的に移していくという中長期的計画を立てることが必要かもしれません。ただ若い人には若い人なりにその時のライフステージがあって、そういうものへ正面から立ち向かったり、上手に逆手にとったりすればいいわけです。社会全体の大きなビジョンまでは持ち合わせていませんが、そういう環境を選べる多様性のある自由な許容度の高い社会をつくらせたいと強く願っています。

阿部) 有難うございました。では最後の質問になります。さっき塩瀬さんが100年後の日本という本を紹介してくれましたが、我々は100年後ではなくて、SDGsというかたちで2030年、50年といった10年、20年先のことを見越して目標をたてております。敢えてベタな質問をさせていただきますが、SDGsについて、どんなことを考えているのか。濱川さん、塩瀬さん、中田さんの順で、お考えをお聞かせ願えればと思います。

濱川) 最初に阿部さんがおっしゃったと思うのですが、日本では、特に政府、民間セクターなどがバッジをつけるなどして活動していますが、インドネシアとか東南アジアにおいてはほぼ聞かない。勿論、開発援助とかソーシャルインパクトに関わっている人は知っているのですけれども、それを大々的に出して活動することは少ない。それが日本でとてもはやっていて、SDGsウォッシュと言う言葉もここ1~2年出てきました

が、本質的なものと PR 的にやっているものがあると思います。ただ企業が本格的に社会貢献だとか環境問題に取り組むということは今までなかったことなので、全体的には日本にとってはいい流れなのかなと思っています。ただしひとつ思うところは、2030 年って 10 年後であり本当に短期的、中期的なことなので、そこにゴールを置くのではなくて、Beyond SDGs というか、そのむこう 2050 年とか 2100 年にどういう企業になっていくか、どういう社会にしていきたいかということを考えていく必要があると思います。というのも、社会は 10 年ぐらいのスパンではそんなに変わらないので、そこに焦点をあててしまうと結局すぐ短期的かつ盲目的になります。そこに辿り着くのではなく、2030 年というのは一つの通過点として、その向こうの 2050 年、2100 年ぐらいを見据えてビジョニングする必要性を感じています。

阿部)はい、有難うございました。では塩瀬さんお願いします。

塩瀬)正直に言いますと、講演などで SDGs ごっこは止めましょうと話をするようにしています。それは、何か対岸の火事に何かしてあげるといような、さっきの「ために」というところが先行してしまっており、それをゲーム的みたいな解決にしている、対象化しすぎる気がするのです。学校などでも SDGs をプログラム化したいので、例えば高校とかでも、SDGs は英語の授業でやるべきでしょうか、それとも世界史や社会の時間でやるべきでしょうかと聞かれるのですけれども、私は「家庭科でやるべきではないですか」ということを、家庭科という雑誌に書かせていただいて、何故かと言うと、それはそれぞれの国で起こっている暮らしの話であって、なぜか特別視し過ぎて、貧困だから可哀そうという前提で入っていることが教育上よろしくないと思っているのです。大人が勝手につけたルールの中に閉じ込めているだけのような気もして、それは役所の中でも、失われた 30 年をどう取り戻すかということで経済政策が打たれたりしていますが、去年会議の時に失われた 30 年というのを大学生と話をする、みんな平成生まれですので、「私たちの時代って無かったことになるのでしょうか。」「僕たち、私たちは楽しく暮らしているのに、勝手に絶望しないでください」と言う学生さんの声を、そっくりそのまま審議会で紹介させていただいたのです。昭和のノスタルジーで勝手に絶望するのではなくて、むしろ将来を決めることというのは、若い人たちが作ったほうがいいのではないですかという話をしました。すると今年 30 歳前後の審議会、若手ワーキングというのを作ってくださって、これは本当に画期的なことだと思います。政府の政策に物申せる審議会の中で、30 歳前後の人たちだけで集まって考え、そこに ELPIS というグループを作って企業とか大学の若手とも連携しながら、自分た

ちの社会や未来を作っていくことに声を出していけるような若手が動けるチャンスが出来てきました。これは先ほど濱川さんが紹介くださったビデオの中で出てきた、私たちの社会・地球というのは先祖からもらったものではなく、次世代から借りているのだと話されていたことがまさしくそのとおりであって、先祖からもらったものと思っているから一番上の人が小出しに次の世代にお裾分けのように渡してあげていると勘違いしてしまうので、逆に次世代から借りていると思ったときに年代の上の者がちゃんと作って返していくことが非常に大事なので、次の子たちの活動を邪魔しないことが最善の術ではなかろうかと思っています。そういう意味で、SDGs の社会課題を子供たちの勉強に使うのが嫌で、課題を作ったのは大人だから大人が解決したほうがよく、子供たちにはもっと明るい未来を創ることができる、そのお手伝いを大人がしていくべきではなかろうかと思っています。

阿部)有難うございました。そうしたら、中田さん。

中田)私はこのような業界で生きてきましたので、何年かおきに国際機関や国連が新しいテーマをたてて国際社会へ働きかけることを延々と繰り返してくるのを見てきており、今回もその延長線上に過ぎないので日本では受け入れられないだろうと思っていました。ところが予想外に多くの人々がこのことに関心を持ち、特に企業から SDGs へ取り組みたいという声が多く上がっていて、いろんな要因があるとは思いますが、私は日本の社会も変化してきたと感じています。大きく分析してみると、今の日本社会で生きている多くの人たちが、現状にはそれなりに満足しており、このまま悪くならないといいと思っている。その反面、どんどん続く社会の変化に一抹の不安も感じており、それに対するひとつの対案を、SDGs 的なものが示してくれているのではと何か直感的に捉えられて、日本の社会において大きなアクションとなって表れてきていると見ています。日本にとって、良い事ではないかということで締めくくりたいと思います。

阿部)中田さんらしい、締めくくり方だと思います。時間がきてしまいました。三人の方のいろんなお話のなかで、自分自身が行動を変えていくヒントを沢山得られたと思います。我逢う人ですか、我々も今日この魅力的なお三方と逢うことができ、本当に豊かな時間を過ごせたと思います。改めて、三人の方にお礼を申し上げて、このシンポジウム、パネルディスカッションを終わりたいと思います。(終了)